

タシカニの語史 —〈譲歩〉用法の成立過程及びその要因—

清田朗裕

現代語の叙法副詞タシカニは、〈確認・同意〉用法と〈譲歩〉用法に大別される。本研究は、そのうち、〈譲歩〉用法の成立過程及びその要因を、文献資料を用い、その語史を記述しつつ明らかにするものである。

叙法副詞タシカニの〈譲歩〉用法は、(1) の基本構造をもつ。文献資料を調査すると、この構造は近世からみられた。

(1) (X)。 タシカニ Y。 逆接表現 , Z。

- ・X: Yの内容の根拠となる情報や内容(非明示的な場合もある)
- ・Y: Zと異なる(対立する)内容
- ・Z: 本来の主張・立場に関する内容(X, Y, Zの説明は、調査結果から、帰納したもの)

用例を観察すると、Yには、「分かっている」という、話し手の話題に対する心情理解がみられ、一方、Zには、現実世界の内容が対置される形で現れていた。ここから、Yは、話し手の「主観的世界」に該当する内容が入り、Zには、「客観的世界」に該当する内容が入ると考える。そして、客観的世界の方が、より確実で、信用がおける、間違いのないものであることから、Zの部分で、主張・立場を表し、Yには、Zによって否定される、異なる内容が置かれることになる。話し手による主観的世界と現実の客観的世界の対置が、〈譲歩〉用法の理解において重要だと考える。

ところで、タシカニの〈譲歩〉用法は、ポライトネス理論における、ポジティブ・ストラテジー6「不一致を避ける」に該当すると思われる。森勇太(2016)『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』(ひつじ書房)等によれば、中世から近代にかけて、発話行為や配慮表現の言語形式が発達する時期と考えられ、相手との円滑なコミュニケーションを図るために、配慮を示す手段として、タシカニの〈譲歩〉用法も発達したと捉えることができる。

なお、タシカニの〈譲歩〉用法は、レポート・論文執筆上でも、重要な表現である。ポライトネス理論との関連を考えることで、さらに考究できると考える。